別紙

令和６年度　学力向上プラン

学校名　　日本橋中学校

学校の教育目標

○考える人になろう	○心ゆたかな人になろう
○たくましい人になろう	○みんなのためにつくす人になろう

教育目標を達成するために学校として重点的に育成を目指す資質・能力（確かな学力向上にかかわる内容）

(1) 各教科の年間指導計画と評価計画の充実を図るとともに、評価の基準を示し適正に実施する。
(2) 国語・数学・英語科で少人数、習熟度別の指導、タブレットの活用等、個別最適化を充実させる。
(3) 授業規律を徹底し、落ち着いた環境で授業を進め、基礎基本の確実な定着を図る。
(4) 校内研究、授業観察、話し合い活動モデル、振り返りシート等で、毎時間の授業の質を向上させる。
(5) ICT 機器等を活用し、問題解決型の学習（協働的な学習）を通して、資質・能力の育成を図る。
(6) 各種検定の取組やサプリノートの活用を通し、自学自習の意識を向上させ学習習慣の確立を図る。

令和６年度「学習力サポートテスト」や令和６年度学力向上プランの検証結果、学校評価の結果等によって明らかになった課題及び要因

	児童・生徒の学力の課題	主な要因
国　語	「令和６年度学力サポートテスト」において、 ・１年生は、すべての領域において、目標値よりも10ポイント以上上回ることが出来た。一方で、内容別では漢字を書く項目が目標値よりも5.1ポイント下回った。 ・２年生は、すべての領域で目標を達成することができた。内容別では話し合いの内容の聞き取り、文法・語句に関する事項が目標値をそれぞれ0.7ポイント、3.2ポイント下回った。 ・３年生は、すべての領域・項目において、目標値を上回ることが出来た。	・１年生は小学校の漢字の定着が不十分な生徒も多い。 ・２年生は今年度に入り、話し合いの機会や問題演習の機会をあまり設けられずにいた。
数学	「令和６年度学力サポートテスト」において、 ・１年生は、すべての領域において、目標値より10ポイント以上上回ることが出来た。一方で、内容別では百分率の項目が目標値よりも16.5ポイント下回った。 ・２年生は、「関数」の領域で1.7ポイント、「データの活用」の領域で6.2ポイント目標値を下回った。内容別では一次方程式の立式が目標値を22.5ポイント下回った。 ・３年生は、すべての項目において、目標値を上回ることが出来た。一方で内容別では証明が目標値を15.7ポイント下回った。	・文章から数量関係や、図形の特徴を捉える場面が少なかった。 ・１年生は割合の復習を行う場面がなかった。
社　会	「令和６年度学習力サポートテスト」において、１学年の正答率は目標値を8.5ポイント上回り、３学年は2.2ポイント上回ったが、２学年は5.7ポイント目標値を下回っている。	観点別正答率の知識・技能の正答率も全体の正答率と同程度のポイントで目標値から離れている。また２学年は昨年度の１学期に学習した単元の正答率が低い。

理　科	・「令和６年度学習力サポートテスト」において、２年生が総合成績で目標値から11.9ポイント下回っている。 ・「令和６年度学習力サポートテスト」において、２年生が昨年度の総合成績より、１ポイント下回っている。	・２年生で、学力向上に向けた取り組みに効果が現れなかった。 ・２年生で、テストにおいて問われる問題に対し、科学的思考から解答することがあまりできなかった。
英　語	・「令和６年度学習力サポートテスト」において、1学年は主体的に取り組む態度と活用力を伸ばすことがバランスのよい英語力の育成につながるとわかった。 ・「令和６年度学習力サポートテスト」において、2学年は区の平均より基礎問題は6.2ポイントも低く、基礎力の定着に課題があることがわかった。特に、復習すべきは三人称単数を使った英作文と、会話の流れにあった英文を書く力、また読解も課題。	①１学年は、自分が伝えたいことを正しく書く取り組みと、日常会話をリスニングする機会が充分でないためと考える。 ②２学年は、基礎力の定着不足が要因。特に、書く力が課題。 ③３年間、授業の中で４技能を伸ばすことを目標に授業を組み立てている。表現活動、特に「書くこと」に時間を当てる必要がある。
保健体育	学校平均が全国平均を下回った種目が、握力、長座体前屈、シャトルラン、50m走である。	・日常生活において、強く握ったり、掴んだりする機会が減少したから。 ・本校の施設が規模として小さく、運動をする場が制限され、身体を長く動かす機会が減少しているから。

学力向上に向けた視点		年度末までの目標及び指標
①各教科	国語	「令和７年度学習力サポートテスト」において観点別正答率が３学年とも目標値を上回れるようにする
	数学	全学年・全目標において、目標値を下回らないようにする。
	社会	「令和７年度学習力サポートテスト」において観点別正答率の知識・技能の正答率が３学年とも目標値を上回るようにする。
	理科	・令和７年度学習力サポートテストにおいて、教科全体で全国の平均値を目指す。 ・学習力サポートテストの問題と同等の小テストを実施し、学習力サポートテストの結果を上回るようにする。
	英語	①１学年は自分が伝えたいことを正しく書く力と、日常会話をリスニングさせる機会を増やすことで、来年度の学習力サポートテストの実施で今年度を上回る。 ②２学年はユニットごとの単語テストや暗唱テストなどを通し、日常的に学習習慣をつけさせることを更に徹底し、来年度の学習力サポートテストで基礎力の区平均を上回る。

	体育・保健体育	令和７年度の東京都児童・生徒体力・運動能力、生活・運動習慣等の調査において、生徒の８割がＣ以上になるようにする。また全国の平均値を下回っている課題となっている項目については生徒の７割が都の平均値を超える。
②授業改善		今年度の学校評価アンケートにおいて、確かな学力の定着と向上に関する質問への肯定的な回答の割合が、前年度を上回るようにする。生徒90%、保護者75%以上を目指す。
③家庭との連携		今年度の学校評価アンケートにおいて、地域や家庭との連携に関する質問への肯定的な回答の割合が、前年度を上回るようにする。特に割合が低かった「生活と学習のサプリノートを活用し、学習・生活状況の把握を行い、学校と家庭との連携を深めていますか。」という質問への肯定的な回答が70%以上になるようにする。
④体力向上		目標「運動意欲を高め、生徒が生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現できる資質・能力を身に付けられる指導をする。」 指標① 「次年度の体力・運動能力テストで東京都の平均値を越える項目を増やす。」 →「握力(筋力)」、「シャトルラン(全身持久力)」「長座体前屈」「50m走」について、東京都の平均値とほぼ等しくなるようにする。 指標② 「教科指導において、事前事後アンケートを実施し、運動有用感を高める。」 →「運動やスポーツに関わることは好きですか？」の項目に対して、肯定的な割合を８割以上にする。

【目標達成のための具体的な取組内容】

①各教科	
国語	・漢字や文法、語彙といった知識・技能の領域において、主体性を引き出しながらテストなどを繰り返し、知識の定着を図る
数学	・すべての単元について、基礎基本の定着を図るために、プリント演習に加え、テストごとの復習に取り組む。 ・基礎・基本が定着している生徒に対しては、活用問題を積極的に提示し、数学の学習への主体性を高めることで、活用力の向上に努める。
社会	単元末の授業の際に行う単元テストの前に、単元の基本的な語句を確認する単語チェックテストをタブレットで実施する。
理科	・問題集、学習アプリ（ドリルパーク）を定期的に家庭学習の課題として行わせ、基礎知識・技能の理解を深める。 ・小テストの回数を増やし、問題の読解力を高めることと、基礎基本の定着を図る。

英語	①１学年は、ALT との授業等で日常会話を聞かせる機会をつくる。３～５文のまとまった英文で自己表現をさせる書く力を育てる。 ②２学年は、単語テスト後の復習課題を授業内で行うことと、１学年の基本文から書かせる取り組みを帯び活動で行うことで基礎力の定着を促す。
体育・保健体育	・各単元における事前事後アンケートを実施し、生徒の実態を把握した上で、バランスよく体力の向上を目指した年間指導計画を作成する。 ・授業の導入時におけるコーディネーショントレーニングの種目数を増やすとともに、トレーニングの原則や種目における目的を説明する。また体つくり運動の単元を通して、自らの運動計画を立案する。 ・運動、スポーツを“する”だけでなく、“見る、支える、知る”など、多様な関わり方を通して、運動やスポーツを身近なものにする。
②授業改善	
取組Ⅰ	研究推進委員会を中心に、授業改善を目的とした研究授業及び OJT を行う。学年ごとに指導案検討や研究協議の運営を行うチームを編成し、授業者だけではなく全員で授業改善に取り組む。
取組Ⅱ	ミライシードなどタブレット端末を活用し、生徒が自ら学習に取り組む仕組み作りを行い、学習習慣の確立につなげる。

③家庭との連携	
取組Ⅰ	「生活と学習のサプリノート」を活用し、生徒の生活や学習の状況を把握するなど生徒理解に努め、家庭との連携を強化する。また、各学級でサプリノートが活用されているかを検討したり、情報交換する等、取り組みを向上させる。
取組Ⅱ	学校公開や行事等のアンケートでは、ICT を活用するなどして即時に結果を参照できるようにして、保護者の意見を素早く教員が把握し以後の教育活動に反映できるようにする。

④体力向上	
取組Ⅰ	生徒が自ら体を動かしたくなるような企画や授業を行い、楽しみながら継続して体を動かせるようにする。 ①各単元における事前事後アンケートを実施し、生徒の実態を把握した個別最適な授業を実施できるようにする。 ②運動やスポーツを“する”だけでなく、“見る、支える、知る”など、多様な関わり方を通して、運動やスポーツを身近なものにできるように、ICT 機器の活用や運動観察の方法を提示し、仲間と協同的に取り組むことができるようにする。
取組Ⅱ	毎時間の授業で体つくり運動を取り入れる。体力テストを実施し、生徒一人一人が自身の健康や体力を把握するとともに、健康の保持増進するための運動を自ら実施できるようにする。

【取組結果の検証】

学力向上に向けた視点		取組の成果	取組の課題及び解決策
①学力基盤	国語	定期的な小テストの実施、長期休業を使った漢字の学習で漢字の定着を図ることができた。	読む力において、課題がある。三年間を見通して段階的に読みの学習を行う。
	数学	定着度に合わせた演習課題設定や、ICT 教材による視覚的な理解を通して、主体的な取り組みを促すことができた。	主体的に学習に取り組む態度の育成と評価の一体化が不十分。日々の学習活動に基づく具体的な評価基準と行動指標を設定する。
	社会	単元テストの平均点が年度当初に比べて歴史は2.56ポイント、地理は12.84ポイント上がった。	単元の振り返りとの時間の兼ね合いが難しい→振り返りを先に行った後に小テストを実施する。
	理科	基礎学力向上に向けた取り組みから、学習内容を理解した生徒が増えてきて、学習意欲の向上にもつながった。長文の問題があるテストにも解答数が増えてきた。	家庭学習にあまり取り組まない生徒もまだいる。学習時間を決めた課題や、今よりも基礎的な内容にするなど、家庭学習を行いやすくする。
	英語	既習事項を使って自己表現することに慣れ、まとまった文章を躊躇無く書く生徒が増えてきた。	さらにコミュニケーションを行う場面ごとに積極的に言語活動を行う授業展開を行っていく。
	体育・保健体育	・単元全体を通して、自らの運動計画を立案することができた。 ・運動、スポーツを“する”だけでなく、“見る、支える、知る”など、多様な関わり方を通して、運動やスポーツを身近なものにすることができた。	・運動に積極的に取り組み計画を立案することはできているが、自己の課題を認識して効果的な運動を選択実践する力には課題がある。保健の授業も関連付けながら、将来にわたり主体的に運動やスポーツに取り組めるようにする。
②授業改善		令和６年度学校評価アンケートの「生徒は主体的に学び、分かった、できたの実感をもっていますか」という質問に対し、生徒の肯定的な回答が91.8%であり、昨年度から4.9ポイント上昇した。	保護者の肯定的な回答が69.9%であることから、生徒の実感が保護者に伝わっていなかったり、評価から読み取れなかったりすることが課題だと考える。教員が評価についての理解を深めるとともに、年度当初に評価計画等について丁寧に説明するなど、授業の成果が伝わるようにする。

③家庭との連携	「生活と学習のサプリノートを活用し、学習・生活状況の把握を行い、学校と家庭との連携を深めていますか。」という質問への肯定的な回答が70%以上になるようにすると掲げていたが61%に留まった。「学校は地域や家庭との連携や協力体制を十分にとり、地域の学校として機能している」という項目については前年度からの上昇が見られた。	サプリノートについては保護者欄記入の負担などから、来年度は家庭との連携という観点で活用しないこととした。TETORU を活用した情報の発信や、担任等と密に連絡を取り合うなどして家庭との連携を深めていきたい。
④体力向上	○学校評価アンケートにおける「学校は生徒の健康・体力の増進に努めている」という項目では、肯定的な意見が 93％（前年76.5%）と、高かった。 ○「次年度の体力・運動能力テストで東京都の平均値を超える項目を増やす」では、「シャトルラン(全身持久力)」「長座体前屈」「50m走」について、東京都の平均値とほぼ等しくなる又は上回った。「握力」が下回っている。	・体力・運動能力テストで、「握力」が都の平均値を下回っている。次年度は握力を向上させる運動を意識的に取り入れていく。 次年度も、教科指導において、単元学習の事前事後のアンケートを実施し、生徒の実態に応じた授業を展開し、運動有用感を高める。また、男女共習の効果を活かし、他者を理解し、健康や安全に関する能力を身に付け、学び合い、教え合う授業を展開する。